

## 加藤コレクション



写真提供…多様性生物希少標本ネットワーク

トキ *Nipponia nippon*  
(加藤コレクション 標本番号AV035)

同志社には、東京大学学術標本コレクション(インターメディアテック)、京都大学総合博物館にも引けを取らない貴重な標本類が保存されている。加藤延年氏(1866-1945)が蒐集した「加藤コレクション」(約8000点)がそれである。

福岡県柳川藩士の家に生まれた加藤氏は、海老名弾正(第八代同志社総長)の勧めで同志社普通学校に入学、卒業後は熊本英学校などの教員を経て、1899年同志社普通学校の教諭となった。ここで地理学、博物学、数学などを女学校と掛け持ちながら担当し、1933年退職後、嘱託として博物室の管理に専念した。また、島津製作所の博物顧問や、平瀬貝類研究所の研究員も兼務している。加藤氏が蒐集した各標本には、多くの同志社関係者の思いが込められている。以下、同志社創立六〇年誌(1935)からの引用を中心に紹介してみる(『』内は引用)。

「同志社に來て見ると恩師マーシャル・ゲンス先生の集められた豊富な動物標本がある。又恩師兒玉信嘉先生が蒐められた動物標本もある。その上不足は云えぬ。」

熊本英学校にはひとつの標本もなく苦勞した加藤氏が、同志社の標本に接しこのように記している。そして、ここから「加藤コレクシオン」の蒐集が始まる。

「動物園の駝鳥が死んだと聞いて村井理事に相談する。……東京にラッコの標本があると話すと、中學二年の生徒さん達が毎月五錢、十錢宛持よつて一年かかつて買ふことになる。ミカドキジと奄美の黒兔の標本が手に入つたから、遂に無理算段して私費で買つて寄附する。鯨の頭骨を手に入れては望月一丸氏に迷惑をかける。山本唯三郎氏の虎狩の話聞いては豹虎豺熊の標本を買ひ受ける。と云つた様な風で段々と博物室の内容が加はつて來た。」「デウイス先生の夫人は先生の遺物である珊瑚類一箱を寄附せられ」「木村清松牧師は南洋からシヤコの巨殻や獨木舟の模型を持ち歸つて寄附された。」

このように時には私費も投じ標本を購入した。その他に、『銀草』『極楽鳥』『蜂雀』『スカンク』『鰐』『イグアナ』『象の骨』『尾白鷺』『黒貂』など牧師の友人等からの寄贈も多し。『河馬』『編馬』『キウイ』は学校費用で購入している。これらの蒐集された標本類は、今に至るまで多くの見学

者に多大な影響を与え続けている。最近では、芥川賞作家の藤野可織氏の作品「おはなしして子ちゃん」は、同志社中學在学中のサル標本との出会いがきっかけで生まれている。現在、「加藤コレクシオン」は、同志社小学校の東側「吉峰館」に収蔵されているが、隣の小学校に「インドゾウの足」、中学校に「カバ、ラクダ、ウマ骨格」等が、高校には貝類標本等が保管されていて、日々の児童・生徒に、生物の多様性と奥深さ、形態の科学を伝えてくれている。

最後に、加藤氏が生前切望していた「同志社博物館」への思いが込められた一文を紹介し、同時に私からの願いともさせていただく。

『剥製の動物をして出来るならば：パノラマ式に背景を添へ、以て教育的價値を増さんとすることは近代の流行であるから、将来同志社博物館完成の暁には之を試むべきである。……歐米の有名な大學には大抵附屬の博物館があるから、同志社にも附屬の博物館があつて然るべしと信ずる。』

(付記)「蒐集」という語には、「根氣と氣力、情熱、お金をかけて探し求め、蒐めに集めるといふ執念が込められている」と言われている。本稿でもその意味で使用した。

(中学校高等学校教諭 田邊利幸)  
たなべとしゆき